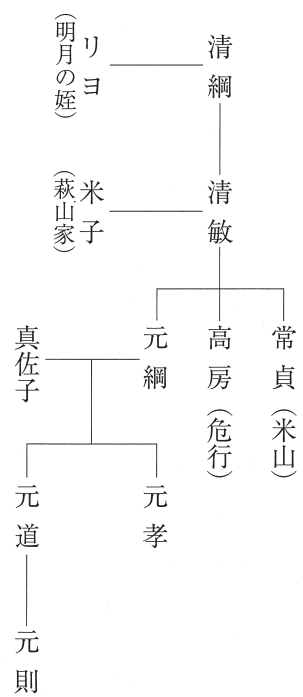


書を愛し、国学を
研鑽した三兄弟

三輪田 米山と三兄弟

元松山市考古館長
伊予史談会会員
大野 慶一

三輪田兄弟の略系



若い頃の三輪田米山

一、三輪田米山

三輪田清綱の妻はリヨといって、明月上人の姪にあたる。

清敏の妻は米子といって、久米の萩山家より入っている。

清綱・清敏は、日尾八幡神社の祠官で、祖先代々の世襲の役職である。

米山は清敏の長男で、幼名を秀雄と称し、国学者の野之口隆正が来松した折、入門して常貞の名を貰い、号を米山、得正軒主人ともいった。

米山は幼時より、囲碁を好み、五歳で初段になり、大人を相手に堂々と碁を打ったという。学問を好み、和漢の書を学び、諸国をめぐる研鑽を積む。嘉永元年(一八四八)父清敏が亡くなつて帰郷し神職を継ぐ。いっしか書に興味をもち、祖母が明月上人の姪であり、叔父明月より自筆唐詩選二冊を貰い、米山はそれを所蔵して熱心に書を習った。

また、久米鷹の子の庄屋、乃万家の



米山が生まれた日尾八幡神社。鳥居の前の注連(しめ)石には米山の書が刻まれている。「魚躍」「鳥舞」明治13年、米山60歳の筆

に王羲之の書帖があつて、米山いたく感嘆して、借用を願つたが借用は許されず、毎夜乃万家を訪問して、王羲之の書法を練習し、夜を徹して曉に及ぶこと二十五年間、一日も怠らず通つて学んだという。米山の書は、王羲之の粹を学び、自身の書風を体得したといわれている。従つて、明月に入つて明月を出て、王羲之を学んで、王羲之を脱け出していると言われている。

後に、三輪田塾を開き、書道だけでなく、国学や儒教の学をも教

え、幕末より明治初年まで、社務のかたわら自宅で近在の子弟の教育をした。弟子としては福音寺の仙波太郎中将や、居相の椿神社神官長男長曾我部延男氏他門人数百人に及んだといわれている。よみかき、そろばんでは一対一の対人教育をした。

米山は、大変に奇行の多い人で、米山にまつわる逸話、エピソードは数え切れない。項目で挙げれば

- 1、長州征伐で藩命により、戦勝祈願を命ぜられたが、松山藩は朝敵で戦勝祈願は出来ないと断った。
- 2、筆法は銜気がなく、洒脱、自由に筆を走らせる。
- 3、酒が好きで、酔うては書き、書いては酔うという。米山にとって酒は、銜い心を去ろうとする方便でなかったか、酒が好きであることを誇



三輪田米山の墓。墓標の字は生前に自ら書いたものである。

張された話でなかったか。

- 4、軍が森神社の幟り軍を軍と書き、抜かにかいくさになるまいがという
- 5、京都の久邇宮家の揮豪により雅印、洋服を下賜される。
- 6、凱旋の書でも紙がなくて反古紙に書く。
- 7、墓碑銘は生存中に書いたもので久米の浄土寺境内にある。

米山は八十八歳で永眠したが、人並はずれて背が高く、体格がよかったので晩年多くの書を残し、松山地方の神社仏閣に、あるいは幟り等に名筆が残っており、戦後になっても全国的書道雑誌に其の名が残っている。

然し、このようによいことだけでなく、酒を飲んで筆をとると出来がよい、飲んでは書き、書いては飲むで、酒代にも事を欠く事多く、酒を飲ませば書を書いて貰え

るといふ噂が広まり、実際、近所の酒屋の扱いは自分の書で済ますこともあったといわれ、「米山のホイト酒」といわれたほどである。このように晩年の人品の評判は、必ずしもよくなかったようでもある。米山の書の真の値打ちを世間が認めたのは、死後数十年経って後の事である。

然し、米山は弘化五年（一八四八）から明治三十四年（一九〇一）まで、五十四年間、日記を書いており、維新前後の動乱の世情とともに庶民の生きざまを書いている。残念ながら明治四年（一八七一）八月の日記が散逸しているから、久万山、久米騒動の詳細な記事はないが、一揆のために被害を受けた庄屋、組頭に対しては、県から米百俵が支給され、保障されたこと。米山は被害にあった日尾八幡の氏子の見舞に畑中、水泥、南梅本、平井谷、福音寺を訪問していること等がわかる。尚、久松定昭の留任運動や東京移住を阻止する動き等、移住のため三津より乗船した様子など、いかに当時の農民が急激な変革を拒否していたかを知る貴重な資料が残っている。

明治十三年（一八八〇）の

日尾八幡神社の書



米山六十歳の筆

明治十五年（一八八二）の

伊予豆比古神社の書



米山六十二歳の筆

明治二十八年（一八九五）の

大山積神社の書



米山七十五歳の筆

二、三輪田高房

高房は米山の弟で文政六年（一八二三）に日尾八幡の祠官、三輪田清敏の二男として生まれた。生来学問好きで、早くから江戸に出て昌平黌に学んだ。当時、昌平黌では、伊予のような田舎にこんな男がいたかと、みんなを驚かせた。特に教授・同僚から恐れられる存在であった。特に易理・数理に詳しかったといわれている。万延二年（一八六一）松山に帰り、十

米山が注連石に書いた文字

四代藩主の松平定昭公に漢学を講じ、明教館の教授として藩士の子弟を教育した。明治五年（一八七二）久松定謨の守役となり、更に明治十年（一八七七）神宮教院副院長となり、明治十二年（一八七九）には久邇宮朝彦親王の侍講を務め、明治十六年（一八八三）、学習院の講師、幹事となるまでに至った。

明治初年、士大夫を自負する人々が多いが、数理の学問を顧みない風潮があり、数理を卑しむことが多かった。彼はこのことを嘆き「数理を顧みずして、どうして用兵・弾薬・衣食の謀を講ずることが出来ようか」といったという。著書として「九仙叢書」「易啓蒙纂要」「易本義纂要」他五十数冊がある。

明治四十三年（一九一〇）八十八歳の高齢で死去し、東京の青山墓地に葬られる。

三、三輪田元綱

元綱は米山・高房の弟で神官三輪田清敏の三男として生まれる。

兄二人と同様に、幼時より学を好み、阿沼美神社の神官田内薫史について和漢の学を習い、安政六年（一八五九）国学者近藤芳樹の来松の機会にその教えを受け、芳樹が長州へ赴くのに同道して、松山を離れ、石見・出雲を歴遊して勤王の志士と交遊するなどして、翌万延元年（一八六〇）帰郷する。

其後、大洲の矢野玄道や常盤井巖戈と交友を重ねる。幕末騒然たる世相に安閑と出来ず京へ出て、平田篤胤の高弟大國隆正の門に入り、国学を研鑽し、王政復古のために働く。後、江戸に出て、平田鉄胤について学を深める。文久二年（一八六二）京都へ戻り、勤王の志士と交わり、元綱は推されてその盟主となる。文久三年（一八六三）洛西の衣笠山の麓にある等地院へ忍び入り、足利尊氏、義詮、義満三人の木像の首をはね、位牌とともに持ち帰り、三条河原に梟し、立札を立てる。「逆賊に天誅を加える」と書き、会津の密告者、守護職松平容保や新選組を糾弾する。後志士たちは新選組に捕縛され主家へお預け、押し込みの身となる。

元綱は但馬国豊岡の京極飛彈守家へお預けになる。豊岡藩は元綱の才を惜しみ、外出を認め、藩校の教授を委嘱したり異例の待遇で幽閉する。五年後明治維新で自由の身となり帰郷して大洲藩の賓師となる。後上京して新政府に仕え、神祇権少祐、大学小丞、外務権大丞となつて、明治二年（一八六九）従六位に叙せられる。やがて病を得て官を辞し松山へ帰る。松山へ帰郷の折

立ち帰る伊予の松山位山
いよく待てよ伊予の松山
の和歌をつくる。
明治十二年（一八七九）五十四

歳で死去。
このように長兄米山・高房・末弟元綱ともに国学の才・和歌・詩の才に秀れて多数の作品を残している。

四、三輪田真佐子

真佐子は元綱の妻であり、日本女子教育の先達として、教育界に大いに貢献をする。父は宇田湖（うたがほ）という公卿（従四位）の一人娘である。父が梁川星巖の門人であり、幼時より天性賢明で梁川の門に入り、星巖の妻紅蘭に師事する。

十六歳から二十一歳まで書道・和歌・国学・漢学を修め、岩倉具視姫の家庭教師を務める。二十五歳の時、皇后（昭憲皇太后）の和歌の添削指導をし、二十六歳で、岩倉具視の媒酌により三輪田元綱（四十二歳）と結婚する。

元綱が大学少丞となり、上京したので真佐子も上京したのは明治二年（一八六九）のことであった。元綱は後、暫くして、岩倉公と政見を異にして合わず、退官して野に下り、やがて病気で明治十二年（一八七九）五十四歳で死去。真佐子は明治十一年（一八七八）松山へ帰り、米山や父の援助で明治十三年（一八八〇）「明倫学舎」という漢学塾を湊町四丁目に開く。
明治十六年（一八八三）愛媛師範付属小で漢学を教え、明治二十年上京して神田に私塾「翠松学舎」

を開き女子教育に力を注ぐ。
明治二十三年、東京音楽学校、府立高女、女子高等師範の講師を務め、明治二十五年、（三輪田女学校）を設立し五十九歳で校長になる。
明治四十五年、勲六等宝冠賞を受ける。

昭和二年勲五等となり、皇后に拝謁し、八十四歳昭和二年（一九二七）死去する。

著書として、明治二十七年（一八九四）「女子の自分」を出版し、其後「女子教育論」「教へ草」「女子家事訓」「女訓の栞」「女子修身書」を続々出版して、女子教育に尽した。

〈参考文献〉

- 一、郷土の歴史ノート（人物編） 大野慶一
- 二、えひめの偉人伝（一一九） 愛媛新聞
- 三、伊予路の文化 松山市教委
- 四、松山百点（平成十一年版） 二〇八号
- 五、愛媛の歴史 松山市教委
- 六、松山市史料集第八巻 松山市